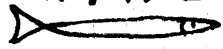


解説



秋ノリと

ワカメ養殖調査から

今年度のノリ、ワカメ養殖試験も海上作業は年末で終り、今は資料整理と反省の時に入っています。各地先の人々とも今後の改善方法について良く話し合つて問題になつた点をはつきりさせたいと考えていますが、とりあ

えず秋ノリとワカメについて、二、三感想を述べて参考にしていただきたいと思います。

一、秋ノリ

① 厚岸の秋ノリ採苗は例年八月中、下旬から九月上旬に行われます。スサビノリが対象ですが、今年度は九月中旬の台風によつて網が流されたために、九月十七日から再採苗し結果的にはこの種が良く伸びて生産されました。この網を見て感じた点は採苗期が九月下旬であつても十一月中旬頃から採取することが充分に出来るので、台風、アオノリ着生、また汚水などの被害を少しでも軽くするにはむしろ早く採りたいと言ふ気持をおさえて、採苗期を九月上旬以前とせずに九月下旬までおくらせた方が、それなりの効果がありそうだと云ふことです。潮内の汚れも時期がおそくなるにつれて少なくなるようですから摘採期に入つてからはノリもきれいに作り良い製品が多くなるのではないのでしょうか。全面的にこの考えにふみ切ることが出来なくても、少くとも早種、おそ種の二種の採苗で比較試験してみてもどうかと考へます。

今までの道内のノリ養殖の関心はどちらかと言へばなるべく早く良い種網をつくつて、早く採る。そのために人工採苗を……と言ふ点に向けられた感がありますが、実際に業を営む人にとつては、ノリを育てる畠とも言うべき漁場がどんな性質の所で、時期によつてどのように変化しているのか、更にこのようにな

畝をどのように利用したら良いノリを多く採ることが出来るのかと語り点を考えることも一層大切なことだと思えます。

② 厚岸の秋ノリでもう一つ感じた点は、網に着生する葉体数が割合に少ないように感じることです。厚岸の一反当りの生産高が全般的に見るとまだかなり低いこともこれと深い関係があると思えます。これは今年度だけでなく、数年來の傾向のようです。スサビノリは二次芽によつて葉体数が増殖しますので採苗する時の胞子着生数はチシマクロノリのように二次芽を出さないものよりはずつと少なくて良いわけですが、この点をまず再検討する必要があります。次に養成段階で二次芽がどれぐらいの大きさの葉体から、どれだけ出されているかを詳しく調べてみる必要もありましょう。根室の調査結果でもスサビノリの二次芽の出方は少し南の方と違うような点が見られますが、この点を道東の秋ノリの一つの課題にしたいと思えます。

このことについて別の面から考えられることは養殖に使用しているノリの種類又は品種の問題です。その一つとしてスサビノリよりも二次芽の多いマルバアサクサノリの試験が考えられます。このことはすでに木下虎一郎博士が「スサビノリ」として試験されたこと

がありますが、その後はあまり関心を持たれないままになつております。全道的にどのような地域に適するかと言う広い試験を私たちは考えておりますが、各地での採苗がむづかしければどこかでまとめて種網を作る方法がとれると思えます。

③ 火敵布沼での秋ノリは断片的観察だけですが、問題は春ノリと同様に沼内の漁場環境にあるようです。ここでは春ノリのように肉眼的葉体が出ないままに枯死したり、浮泥やアオノリの被害が大きいようでした。そこで來年度は第一にこのような原因がどこにあるかを環境の点から少しでも解明する努力が必要でしょう。単に水があるから、波が静かだ網が流されないからノリが採れると言う考えでは、來年の失敗も目に見えています。環境調査は水試の現体制では難しい点も多いですが、最低の目安だけでもつかんで、試験のために協力したいと思えます。

二、ワカメ

① 総合的に見て今年度の道東ワカメ養殖は色々な点で技術の進歩はありましたが、収穫の点では予想をかなり下廻りました。これは一見おかしな表現ですが、発展途上にあつて各地先の養殖環境や技術が充分に確立してい

ない現在では昨年度の疑問が解決されても、今年には思わざる新しい問題点にぶつつかつたと言うことの方があたりまえでしょう。

今年度の問題点を大きく分けると(1)種苗の健全育成、(2)本張り時期の決定、(3)秋の荒天による葉体の流失防止の三点に分類されたようです。

② 種苗育成は根室漁協人工採苗場で一括行つておりますので、これらはむしろ一般漁業者よりも採苗場と水試など各研究機関の基礎的な技術開発にかかつている問題ですから、ここでは他の二つの問題をとりあげてみます。本張り時期をいつ頃にするかはワカメ養殖事業計画の最も基本となる問題です。それはこれを基にして採苗時期も、摘採時期も決定されるからです。特に初摘みを何月何日頃に、何月何日頃に終漁すると言う目標をたてることは、販売上からも、冬をひかえての結水による作業の困難性などからも決しておろそかに出来ない道東特有の問題です。それと共に大切なことは本養成時期の水温の移り変わりであつて、たとえ二十度以下の低い水温であつても、免に角水温上昇が続いている期間にはワカメの小さな葉体には相当に不利な条件があるように考えられます。そしてこれは水温そのものが不適当だと言うことよりも、こ

のような時期（特に七月上旬、八月上旬頃）には色々な海中の硅藻類や小さな動物類が大量に繁殖しやすく、ワカメに附着して窒息させてしまふと言ふことと生物にとつて非常に悪い影響を及ぼす水塊が沿岸に流入するらしいと言ふことです。海水のこのような変化を直接的に知ることは大変難しいことで、現在は殆んど解決されていない問題ですが、少くともワカメなどの生物の生活状態を詳しく観察して行きますと、生物の見方だけではどうしても説明のつかない現象がみられます。昨年七月下旬に本張りした芽が殆んど全滅したのもこのような現象と考えられております。今までの試験結果から見ますと、八月中旬以降は時期がおそれればおそれ程、葉体の発生数が多いことは明らかです。しかしそれと反対に生長もおくれますので摘採時期もそれだけおくれ、場合によつてはまだ小さいうちに氷が張ると言うことになりかねません。根室の調査の例では本養成より初出荷までの期間にはほぼ七十一・八十日は見ておく必要がありますので、例えば八月十五日に本張りすれば十一月初頃に切摘み出来るわけです。そしてこれをもつと早めようとすれば、管理方法を改善して生長を促進させる必要があるわけです。このようにして見ますと、その年の海況が不安定さを抜けて出して安定に向う時期はいつ頃かを正しく見きわめながら、なるべく発生率を向上させ、生長を早めて、一日でも早く沢山収穫すると言ふことは、相当に熱心に母

年の海の状態を記録し、ワカメの観察を怠らないようにしないとなかなか難しい事です。③ エスロンバイブ（浮き）や化繊ローブ資材の導入と、筏の設置方法の改善によつて、秋の荒天による施設の流失が殆んど見られなかつたことはこの事業に大きなプラスとなりました。しかし半面においてせつかく良く生長したワカメが根もとからちぎれて流失すると言ふ問題が根室でも浜中でも大きな問題となりました。昨年十一月以来の荒天続きは最近にないことだと言いますが、古い漁師の人びとは、昔はこれが普通だつたとも言います。私たちは少くとも昨秋のような荒天続きが数年に一度は必ずあることを念願においてこの問題を考える必要があります。根室でも浜中でも本張り直後の浮泥、硅藻などによる芽落ちよりも、むしろ荒天による株の流失の方が多く、根室の調査でも九月上旬の生残率を百%とした場合、十二月の生残率は殆んど五十%以下に下つております。これでは施設が充分に活用されていないばかりか、収量の点でも著しい不利となり、長い間の努力も非常に大きき無駄となるわけです。漁場を決めるにあたり、水深、海底の状況、波の強さなどに充分注意することは単に施設保持だけでなく、このようなワカメ流失を防ぐ上でも大いに重要なことです。このような漁場の性質と共に現在の一定方式の筏養殖だけでなく、施設の而からもワカメの流失を防げるような設計を皆さんで考え試験することが大切でしょう。

以上の外にも問題は色々ありますが、それは又機会を見て説明して行きたい考えです。道東のノリ、ワカメ養殖は道南のような華々しさはありませんが、背伸びをして追いつくことは少しもありません。道東には道東としての良さと難しさがあるのですから、毎年の仕事の中からそれらをはつきりと認識して一歩一歩前進することが大切です。四十一年度もしつかりした計画の下に仕事を はじめよう今から準備をお願いします。

（増殖部 川嶋）